田　　植

水戸駅前から大洪行電車で30分ほどで，ここ東茨城郡常澄村平戸部落である。菜の花は今が満開，ひばりのさえずりもまだとちりがちで，あいにくと雲がたれこめかえるのコーラスもにぎわしく，いまにもなきだしそうな空模様である。

ここではいま陸苗代で育つた，小さくて人手にかかつてはちぎれそうな感じの苗が，秋の実りを胸に，赤いたすきにすげがさつけた早乙女たちによつて，手さばきもあざやかに植えられている。

この乙女たちの賃金も最近の値上ムードが影響してか１日２食付で700円が相場，それでもなかなか集められないとのこと。

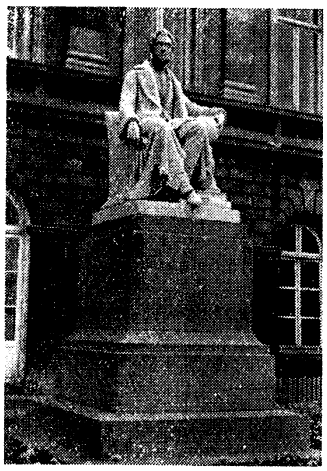
さて本県のいね類の統計を1960年世界農林業センサスの結果からみると，収穫農家数は201,881戸，収穫面積115,392ha，収穫量424,157t，１ha当り収穫量369kg約６俵となつている。

一方，昭和35年県民所得推計結果による，農業生産額は83,751百万円で，そのうち米は37.3%の31,277百万円を占め，２位の麦類11,927百万円を大きく引離して王座を占めている。

ケトレーは待つていた

——ガントを訪れて——

行政管理庁統計基準局長
後　藤　正　夫



1 特急列車

1961年8月31日午前7時，私を乗せたアムステルダム行の特急イル・ド・フランスは，パリの北停車場を発車した。フランス国鉄が欧州随一と誇るこのディーゼル列車は，日本の「つばめ」や「こだま」に色も形もよく似ている。しかし車内の色彩は暗く，シートは2人ずつ向い合つてすわる旧式な固定椅子である。一昨年日本にきた国際統計協会会長のボルドリーニ教授が「つばめ」の展望車に乗つたとき，「ヨーロツパでもこんなりつばな列車に乗つたことがない」とほめていたのが，あながちお世辞でもなかつたように思われた。けれどもさすがにスピードははやく，そのわりに動揺が少なかつた。

私の当面の目的地はブリユツセルであつた。ベルギ！の首都ブリユツセルにあるケトレーの銅像を見るためにわざわざこの列車に乗つたといつてもいいかも知れない，そしてこの旅行は，数年来の私の夢でもあつたのだ。

私がケトレーの遺跡を訪れたいと思うようになつたのは，日本のケトレーとよばれている一ツ橋大学名誉教授の藤本幸太郎先生が，50年前のドイツに留学のころ，ブリユツセルに旅行されてケトレーの銅像を見られたときの感激について，先生の話をうかがつたとき以来のことである。私が15年前に統計家としての第一歩を踏み出したときから，心のよりどころとなつたケトレーについての先生のそのときの話に，私もことのほか大きな感激を覚えたからである。イル・ド・フランスは起伏の多い平野と，リールの工業地帯の単調な風物の中をノンストツプで走ること3時間で，ベルギーの首都ブリツセルの南停車場に到着した。

2 統　計　天　下

アベニユー・ド・アストロノミー（天文通り）を北に少し下ると，プラス・ケトレーの広場がある。ここに面した農務省の玄関前の緑地帯には，真紅のゼラニウムが今を盛りと咲いていた。そのゼラニウムに囲まれて，椅子にもたれたケトレーの巨大な銅像がそびえ立つている。それは，統計という新しい活眼を大きく見開いて，世界をへいげいする巨人の姿とでもいうか，それを仰ぎみる私ははかり知れない威圧を感じた。そのとき私は，大内賞の純銀のメダルに刻まれた「統計天下」という大内先生発明の言葉が，はじめて実感を伴なつて迫つてくるように思つたのである。

いくたびか夢にまで見たランベルト・アドルフ・ケトレーの銅像の前に立つて，私はしばらく胸の高鳴りを鎮められなかつた。

襞幅の広いガウンのような服を着て，肘かけ椅子にもたれたケトレーは，左手で地球儀のような大きな球をおさえている。その足もとには3冊の部厚い書籍が積んである。そして銅像の下の石の台には，アドルフ・ケトレー，1796—1874と刻まれていた。この銅像を見る人々はそれがたとえなに者であるかは知らないでも，偉大な学者であることだけはすぐわかるであろう。

ケトレーは数学者であり，天文学者であり，そして統計学者であつた。統計学者としてのケトレーの業績を象徴しているのが，1835年に彼が著わした「人間について」である。

ケトレーはこの著書の中で，人間の典型をあらわす平均人という考えを提唱し，人間と社会との関係を研究する手がかりを与えている。特に医学において，病人を平均人の状態と比較することによつて，客観的に診断を下せることを指摘し，また平均人を，人間の特性を計量する基準にしようともした。そして自然科学の研究の領域で発達した確率の理論は，ケトレーによつてあらたに社会科学の部面で大きな発展を遂げることになつた。すなわち確率論はケトレーによつて社会現象の研究に科学的基礎を与えて，今日の統計の発達の基礎を築いたのである。

3 帽　子　屋

私を乗せたハイヤーがブリユツセルの西方約60キロのガント市に着くのに，ものの1時間とはかからなかつた。

ガントは人も知る第一次世界大戦の激戦地である。

美しい森に囲まれたパレ・ド・ボザール（美術館）を訪れると，私の来るのをブリユツセルからの電話連絡で

知つていた館長のフアンデルストラート氏は，私を付属の博物館に案内してくれた。そこにはケトレーの書簡や著書「メデイアールの研究」（1852），「統計の研究」（1844）等の初版，それに数葉のケトレーの写真等が，ガラスのケースの中に整然と並べられていた。私はそれらを手にとつて自由に見ることができた。

フアンデルストラート氏は，ケトレーを慕つつてわざわざガントに来る人は少いと，大変よろこんでくれた。そして，それほどケトレーを慕つているのなら，ケトレーの生れた家に行つてみたらどうか。もし行くなら誰かに案内をさせよう，とすすめてくれた。私はその好意をうけて博物館の守衛さんの案内で，再びハイヤーをとばすことになつた。

ケトレーが生れた家は，有名なガントの鐘楼，セント・バボンの寺院，セント・ニコラス教会などにほど近い目抜きの通りにあつた。今日ボルザリノ・ラーメンス商店となつているのが，それで店先にはシヤツポー，ホーデンの看板が出ている帽子屋であつた。そして店の左側の大理石の柱に，ケトレーの彫像がはめこまれていた。その像の下に，「1796年２月22日に，天文学と統計学で知られたアドルフユス・ケトレーが，この家で生れた」という意味のフラマー語が浮き彫りにされていた。

普通にはアドルフ・ケトレーと呼んでいるが，ここにはアドルフユス・ケトレーと書かれているのが私の注目をひいた。私がちようど，このケトレーの横顔を見つめらなが，深い感慨にふけつているとき，鐘楼から美しい鐘の音がひびき渡つてきた。

1796年２月22日に，アドルフ・ケトレーはこの家に生れ，この美しい鐘のしらべを子守唄とききながら育つた12世紀にフランダース候が築いた無気味な黒い城をも，羊毛市場やモザイツクのようなギルドの家をも，古い市役所の庁舎をも，そしてセント・バボン寺院やセント・ニコラス教会をも，一望のもとに見渡すことのできる鐘楼は，幼いころのケトレーのたのしい遊び場であつたであろう。そして科学者を志していたケトレーの夢を育てたのもまたここだつたかも知れない。

幼少のころから数学の天分に恵まれていたケトレーは1817年にガント大学に入り，1819年には早くも理学博士の学位をえて数学の研究にたずさわり，ついで物理学，気象学，天文学等の研究に没頭した。1833年に設置されたブリユツセルの天文台は，ケトレーの建議によつてつくられたものである。

1841年に，ケトレーの提案によつて，統計を重視することと，行政と統計とを緊密にすることを目的とする中央統計委員会が設置され，ケトレーは終世その会長の職にあつた。この委員会が統計の国際比較性ということをとりあげた世界最初の機関であつた。そして1853年にはケトレーが主唱した国際統計会議がブリユツセルで開催され，世界各国から集まつた統計学者や統計家が，各国相互の間の比較のできる統計を作るために協力することを約束したのである。

それからすでに１世紀以上たつているが，国際統計会議は年とともにいよいよ盛大に行なわれるようになつた。１昨年の夏に東京で行われた会議も，また，このたび私が出席したパリの会議も，ケトレーによつて始められたこの会議にほかならないのである。そして今や統計は世界共通の言葉であり，この言葉を使うことによつて国と国，人と人とが，互いに理解と信頼とを深めるために，なくてはならないものとなつている。

私はケトレーのことを考えつづけた。私がきいている鐘の音と同じ音をケトレーもきいていたのだと思うと，私はいつまでもいつまでも，ここを離れたくなかつた。ケトレーが私を待つていた，というような気持が，私を強い力でここに引きとどめているようだつた。

4 小 便 小 僧

やつとケトレーに別れをつげた私は，フランダース候の居城だつた冷たい黒い城を見物した。城内のかつての大食堂に陳列された拷問の道具や，深くそしてうす暗い地下牢などからは，戦国時代の血なまぐさい残虐のあとがしのばれた。あまつさえどす黒い日本橋の下を流れているような水をたたえた堀に映る城の影は，一そうの無気味さをあたりにただよわせているようで，私はすつかり憂鬱になつてしまつた。

しかしそのあと，セント・バボンの寺院で，北欧ルネツサンスの先駆としてフランドル絵画を創設したヴアン・アイク兄弟のえがいたすばらしい神羊の絵を見たとき私は再び明るい気持に立ち返ることができた。

フアンデルストラート氏の厚意を感謝しながらブリユセルに戻つたときは，もう日はとつぷりと暮れていた。市庁舎前テート・ドールの酒場で渋い地酒のギユーツの杯を傾けると，囲炉裏の炎に照らされた私の頬はいよいよほてつた。

外に出るとまた８月の末というのに，ブリユツセルの夜風はつめたかつた。ひねもすよもすがら小便をほとばしらせている可愛い小便小僧の噴水は，いかにもいじらしかつたが，その前で顔を伏せながら，上目づかいにじつと小便小僧を見つめていた観光客の２人の少女の姿はもつといじらしく思われた。